



学校法人  
鎌倉女子大学

## 人の心に感じるもの

教会の天井を支える石組みのペンダントに反響して舞い降りて来るパイプオルガンの荘厳な響きにも、囁くようなグレゴリオ聖歌の声と旋律にも心震わされるものですが、深い森に囲まれ、掃き浄められた日本の神社仏閣の境内に差し込む朝日の厳かさにも心洗われるものです。

かつて、最晩年の祖父が『露滴抄』という小さな詩集を出したことがあり、その中にこんな一篇を載せておりました。

古いわが家の  
松の木の間から  
朝の光がさすとき  
私はいつでもそこに生きている  
—そう思っして下さい

私達日本人の自然に対する感情には、自然の中に神の息吹きが満ち溢れているとする汎神論的な宗教観が、というよりも、もっと直接に自然そのものを神様と見立てようとする素朴なアニミズムが模範的に現れているように思います。

しかし、そうした感情を抱くのは、日本人ばかりかという、必ずしもそうともいえないようで、安倍元首相がくつろいだネット配信番組で、伊勢志摩サミットの時のこんなエピソードを紹介していました。

「海外の首脳が、あの伊勢の内宮さんを」といった司会の問い掛けに、「あれはね、しかもそれまで降っていた雨がね、止んだわけですよ。で、鳥居の前に立って、写真を撮る時に日が差してきてね、やっぱり何か不思議なものを感じるじゃないですか。で、私の気持ちとしてはね、どうだ、これが日本の歴史だ（笑い）という気持ちになるじゃないですか。それでね、ランチって、あのイタリアの首相がね、これ、やっぱり雰囲気はね、バチカンに行った時と同じ雰囲気がある、ここはサンクチュアリだねと。でも、バチカンは豪華な建物があるけれど、ここは全く無いと。全く無くて、森と木の建物があるだけ。しかも、木の建物だって、たった20年ごとに建て替えているわけですから、たった数年前に出来たもの。それなのに、それを感じさせるというのは、これは素晴らしいと。こう、だから、みんなそういうものを感じてくれてね」。

このエピソードを聴いて、なるほどなあと、あの平安歌人の西行法師が詠ったという有

名な和歌を思い出しました。恐らく、安倍氏の話聴いて、この西行の歌を思い出したのは、私だけではないでしょう。

何事のおはしますをば知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ

平安末期、<sup>みかど</sup>帝に仕える<sup>つか</sup>北面の<sup>ほくめん</sup>武士であった佐藤義清<sup>のりきよ</sup>は、世の無常を感じたのか、<sup>おの</sup>己が罪過を恥じたのか、出家し、名も西行と改め、和歌の道こそ<sup>のこ</sup>仏道を修する道と定め、『百人一首』や『新古今和歌集』に収められるなど、多くの歌を遺しました。

兵火によって壊滅的な打撃を受けた奈良の東大寺の再建の<sup>かんじん</sup>勸進のため平泉の藤原秀衡を訪ねたり、途中この鎌倉の八幡様に足を運んで源頼朝とも語り明かしたようで、一再ならず逗留<sup>とうりゅう</sup>した伊勢神宮で詠んだと伝えられているのがこの歌です。清浄<sup>しやうじやう</sup>な伊勢の<sup>もり</sup>杜と簡素の極みの<sup>やしろ</sup>社に<sup>ぬか</sup>額づき、ここに何が<sup>やど</sup>宿っているのか定かには知らないけれど、何ともいえずもったいなく、そこはかたなく<sup>おそ</sup>畏れ多くて、思わず<sup>おの</sup>自ずと涙が溢れてくるといったような意味でしょうか。しかし、先程のレンチ氏の発言は、それが西洋人の<sup>ゲミュート</sup>心意識にも感じられるということでしょう。

もう50年以上も前のこと、同級生がしばらく比叡山に修行に行行って帰ってきて、大学の研究室で、延暦寺で習ってきた<sup>てんだいしやうみやう</sup>天台声明を披露してくれたことがありますが、その雰囲気は、正にグレゴリオ聖歌を連想させるもので、精神の静けさに<sup>いざな</sup>誘う抑揚の近似性に驚いたことがありました。

世界には様々な国があり、様々な民族があり、様々な思想や宗教があるわけですが、頭が理解する理屈や教義ではない、理屈や教義には必ず差異と対立が生まれる、むしろ人々がそれらの<sup>よろい</sup>鎧を脱ぎ捨てて、純粹に心で感じるものこそ、国や民族や思想や宗教を超えて、私達が共有出来る最も大事な価値、生きる基準なのかも知れません。多くの困難が伝えられる時代ですが、せめて争いがない年でありたいものです。

[>前のページへ戻る](#)